

いしのとうこふん
石ノ塔古墳の発掘調査成果

浜松市博物館 鈴木京太郎

1. 調査の経過

浜松市西区伊左地町に所在する石ノ塔古墳は、以前より土が高く残されていることから古墳と考えられていましたが、未調査のためその実態は不明でした。

浜松市文化財課では、当該地で開発事業が計画されたことから、令和元年度に確認調査を行い、横穴式石室を有する古墳であることを確認しました。その後、令和2年度に発掘調査を、令和3年度に出土品等の整理作業を行い、報告書を刊行して調査を完了しました。

2. 古墳の位置と環境

浜名湖東岸地域は、天竜川西岸や都田川流域などに比べると古墳の数は多くありません。石ノ塔古墳は、三方原台地西縁部の小さな谷に挟まれた細長い丘陵状の土地に立地しています。付近に古墳は確認されておらず、単独で築かれたと考えられます。



石ノ塔古墳の位置と周辺の遺跡分布



石ノ塔古墳遠景（北西より）

南を伊左地川、北を花川が流れており、浜名湖に向かって半島状に突き出したような地形を呈しています。

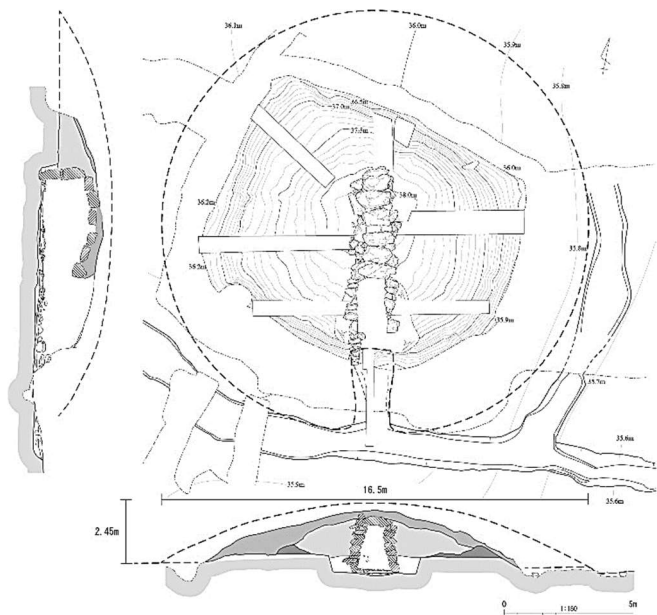
さらに伊左地川の支流の小河川による開析谷が多数形成されており、そうした小規模な谷に挟まれた細長い丘陵状の部分に石ノ塔古墳は築かれています。

3. 墳丘と外部施設

墳丘の裾は後世に削り取られていましたが、墳丘の中心部は約 2.45m の高さで残っており、石を組んで造られた横穴式石室が発見され、墳丘の盛土方法などの築造過程を把握することができました。

また、古墳の周りをめぐる溝（周溝）や、その周溝からのびる溝（墓道）の一部が確認されました。現地は攪乱が著しく、周溝は古墳南側のみの検出に留まりましたが、墓道は東側の谷に向かって延びていました。

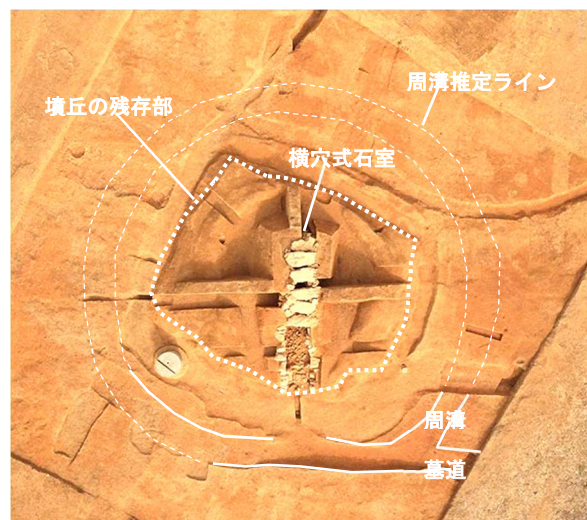
墳丘の規模や形は不明ですが、残存部の状況や周溝の形状などから、直径 16.5m 程度の円墳と推定できます。



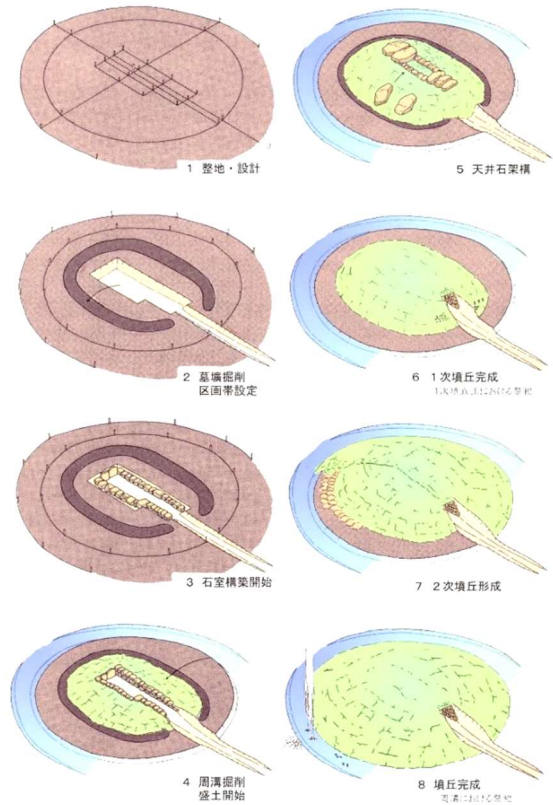
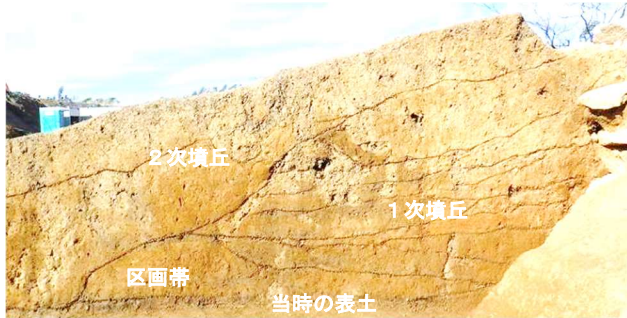
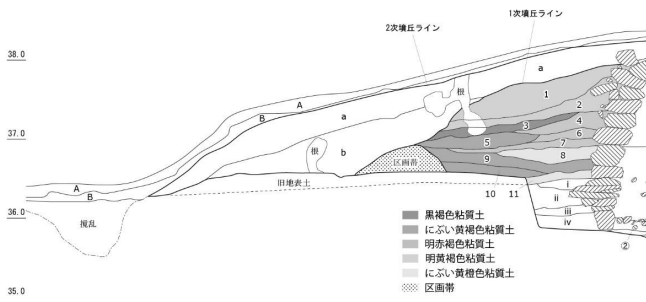
石ノ塔古墳墳丘図



表土を除去した状態の墳丘



墳丘の垂直写真



墳丘の構築過程（モデル：宇藤坂A6号墳）

墳丘断面の土層 墳丘中心部の盛土（1次墳丘）は、石室の石材を積み上げるのと同時に細かな単位で盛って突き固める「版築」が行われています。一方、その外側の盛土（2次墳丘）は、大きな単位で盛られています。

4. 埋葬施設

墳丘の中央部に、石で築かれた横穴式石室が確認されました。石室は、奥より玄室・羨道・前庭に分けられ、玄門・羨門の両側面に立柱石が配される擬似両袖式の石室です。石室は、残存部の全長 7.4m、玄室は長さ 3.5m 幅 1.2m 高さ 1.5m、羨道は長さ 2.1m を測ります。



石室実測図



天井石撤去前の石室 前庭の南側は失われていましたが、全体的に石材がよく残っています。天井石は玄室上には残っていましたが、羨道上では一部は落下するなどして失われていました。

天井石や側壁の石材は、ほぼ全てがチャートです。浜名湖北岸から運び込まれたものと考えられ、石ノ塔古墳から近いところでは、根本山や館山寺周辺にみられます。

天井石撤去後の石室 側壁は上に向かって幅が狭まる「持ち送り」が行われています。

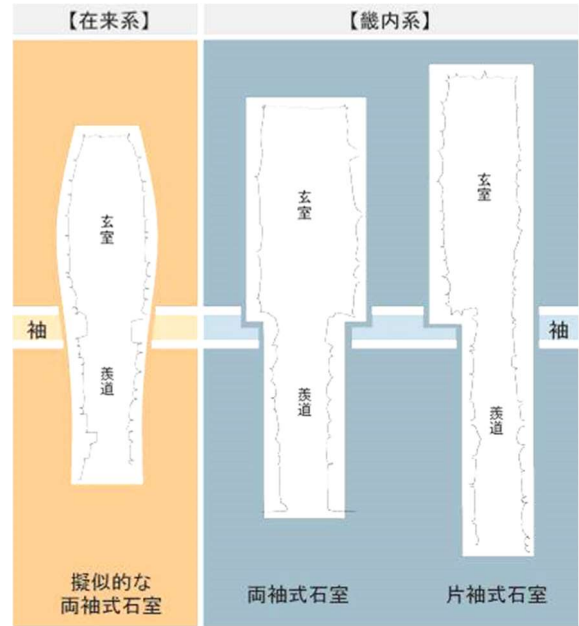
玄室の平面形は矩形を呈しますが、中央部が膨らむ「胴張り」がわずかに認められます。

床面は、玄室には細かい円礫を、羨道にはやや大きめの円礫を敷いています。前庭は残存状況が良好ではありませんが、側壁に用いるようなチャートの角礫を並べて敷いている状況が確認できます。



天井石の検出状況 天井石は6つ残存していました。羨道方向に向かって、弧をえがくように下がっています。

横穴式石室の形態 畿内系の石室は玄室が方形を呈し、玄門に袖を有します。三河地方の影響を受けている石室は、玄室が胴張り状を呈し、玄門には立柱石を張り出させ、天井は弧状を呈するのが特徴です。

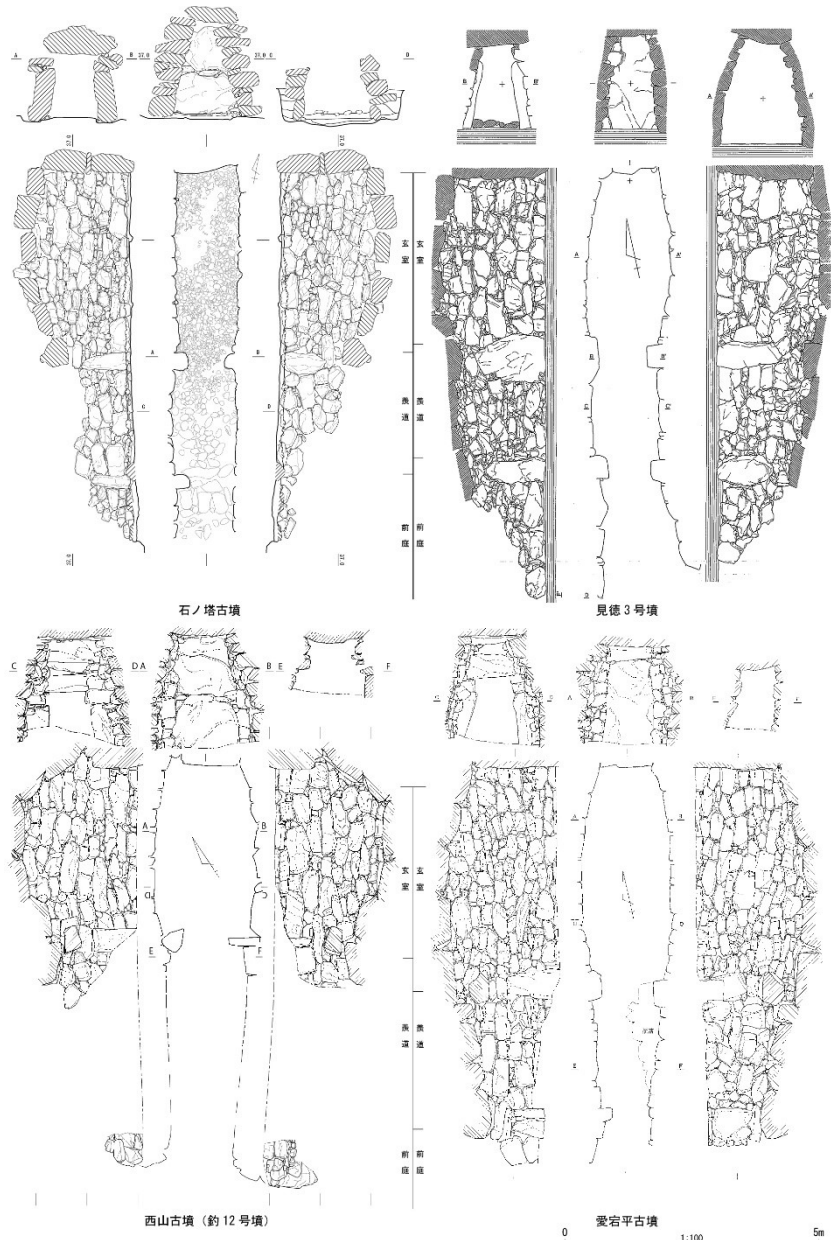


奥浜名湖周辺の擬似両袖式石室

本古墳と同じ擬似両袖式石室を持つ浜名湖周辺の古墳は、北区三ヶ日町都筑の愛宕平古墳、同町釣の釣古墳群の西山古墳（釣 12号墳）、同区引佐町井伊谷の城山 2号墳、同町正楽寺の白山 1号墳、同区都田町の見徳 3号墳、西区館山寺町の弘法穴古墳等が挙げられます。

石ノ塔古墳の石室と対比できる石室として、残存状況が良好で現在も見学することができる西山古墳、愛宕平古墳、見徳 3号墳を図示しました。見徳 3号墳は本古墳と同じく玄門・羨門に立柱石を配する羨門区画形です。玄室の平面形は4基とも胴張りがみられますが、本古墳の胴張りはわずかです。玄室、羨道それぞれの長さは愛宕平古墳が最も長く、本古墳がそれに続きます。西山古墳と見徳 3号墳の玄室長はほぼ同じです。

築造時期は、西山古墳が最も古く、6世紀後葉と推定されています。これに後続するとみられるのが愛宕平古墳（6世紀後葉～7世紀初頭頃）と見徳 3号墳（7世紀初頭）で、本墳は7世紀前葉と3基に後続します。



5. 出土遺物

玄室を中心に、短刀・鉄鏃・刀子・両頭金具（弓の飾り金具）、耳環等の金属製の副葬品が出土しています。耳環は2組出土しており、埋葬行為が少なくとも玄室で2回行われたことがうかがえます。鉄刀と鉄鏃は奥壁の北東隅付近から集中的に出土しており、追葬時に寄せられた状況を示している可能性があります。

羨道や墓道・周溝からは、7世紀前半頃を中心とする土器（須恵器・土師器）が出土しました。羨道出土の土器は残りが良く、羨門の隅付近に集中していることから、埋葬時に羨道に置かれたものが、その後の追葬時に寄せられた可能性があります。



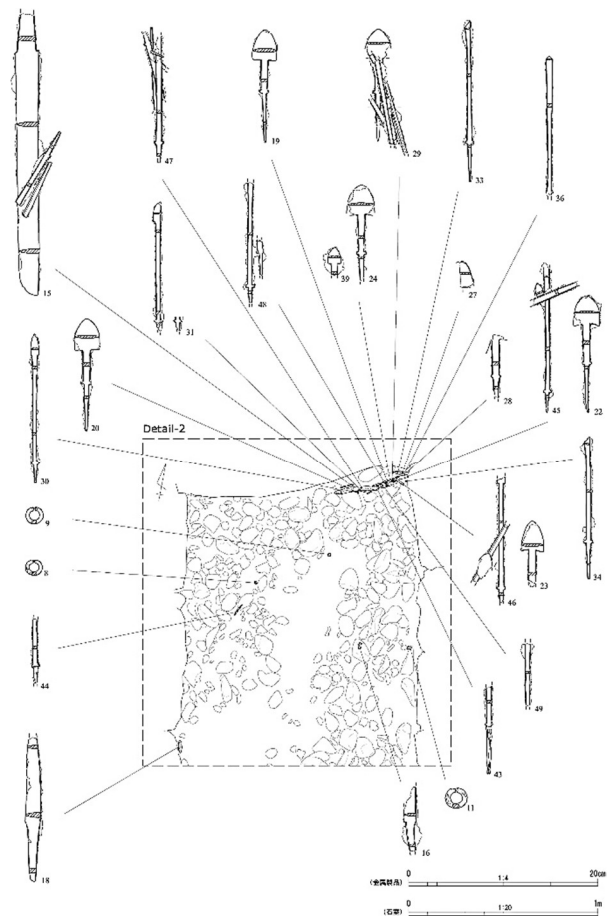
石ノ塔古墳出土遺物



玄室奥壁付近の短刀出土状況



玄室内の耳環出土状況



玄室奥壁付近の遺物出土状態図



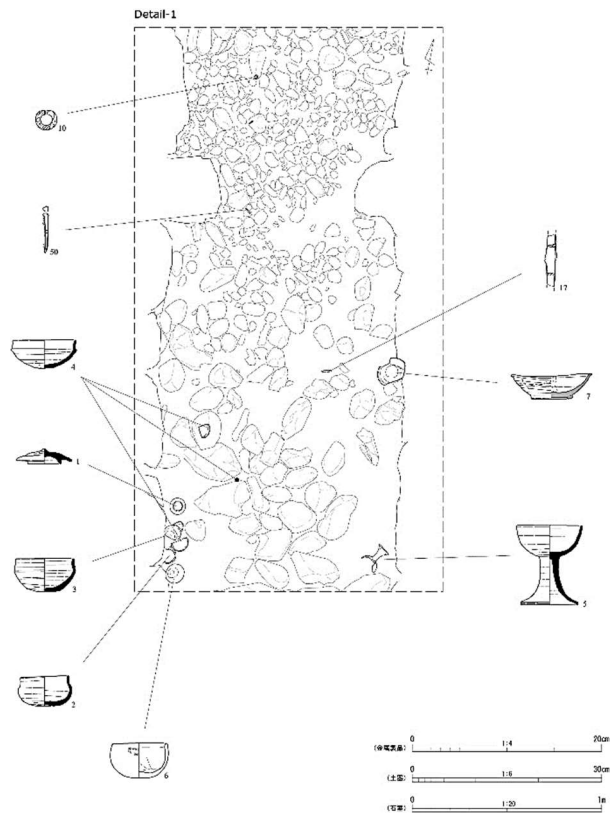
出土金属製品



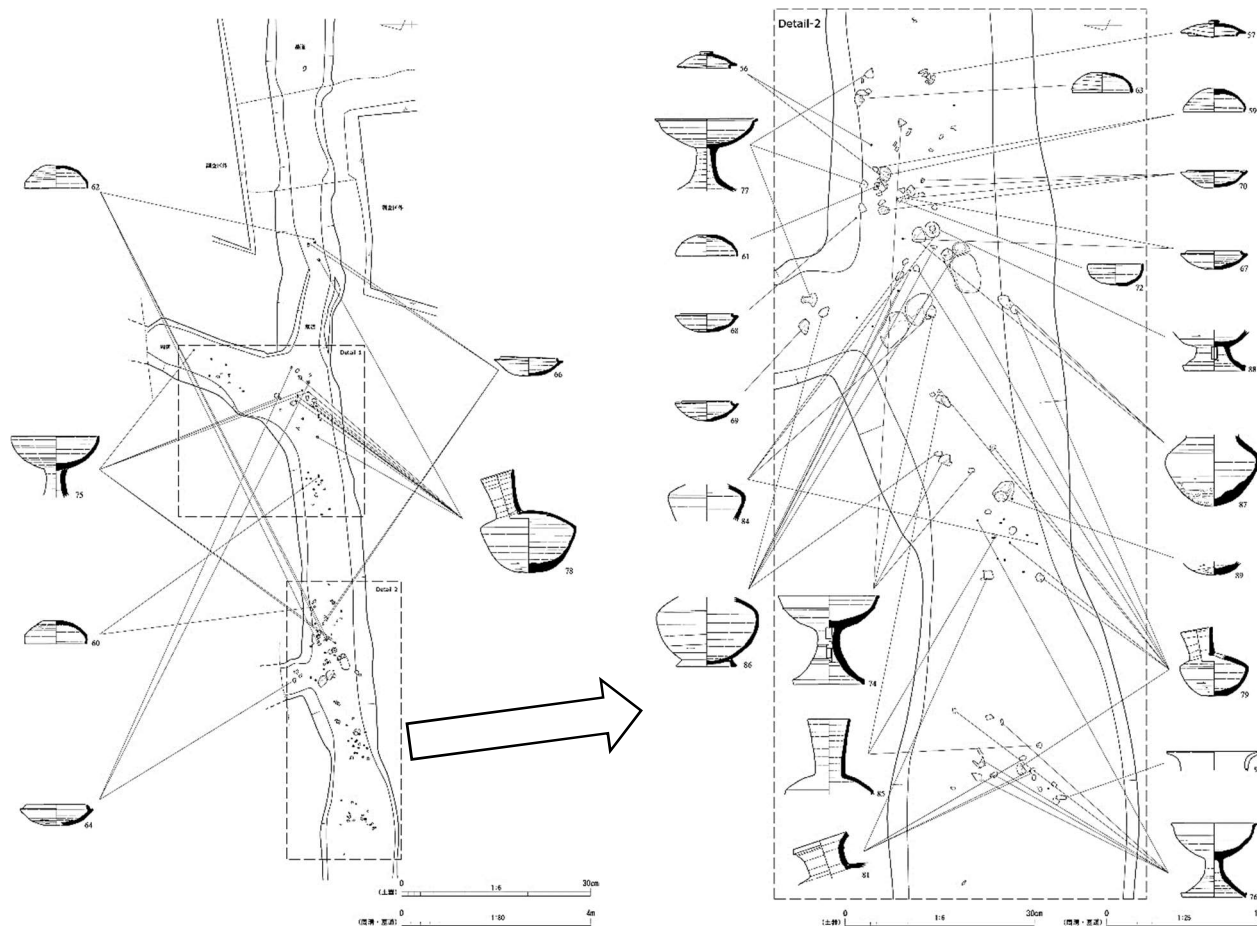
羨道の土器出土状況



羨道出土土器



羨道の遺物出土状態図



周溝・墓道の遺物出土状態図

6 まとめ

墳丘 推定直径 16.5 m、高さ 2.4mの円墳。

群集せずに単独で立地。

墳丘が残存しており、その土層から築造過程を把握することができた。

【当該時期の古墳の規模としては大型】

埋葬施設 擬似両袖式の横穴式石室で、玄門及び羨門に立柱石を配する。

全長推定 8 m以上、幅最大 1.25mで、玄室の平面形はわずかに胴張りがみられる。

天井の縦断面が弧状を呈する。

奥壁に大型の石材を用いる。石材は浜名湖北岸から調達したとみられるチャート主体。

【三河地方の影響を受けた石室形態】

遺物 玄室内は短刀や鉄鏃、耳環などの副葬品が出土。鉄鏃が 59 点と多数。耳環は 2 組出土。

羨道内の出土遺物は土器が中心。周溝や墓道からも土器が多数出土。土器の時期はおおむね 7 世紀前葉頃のもの。

【古墳の築造は 7 世紀前葉で、玄室において 2 度以上の埋葬行為か】

墳丘規模や立地、石室の規模、多数の武器の副葬などから、地域内において階層的に比較的優位な被葬者像が想定されます。浜名湖東岸地域では、古墳や古墳時代の集落遺跡などの数は少なく、発掘調査もあまり行われていませんが、この調査を含めた今後の調査研究の蓄積により、この地域の当時の社会の様子を少しずつ明らかにしていければと思います。